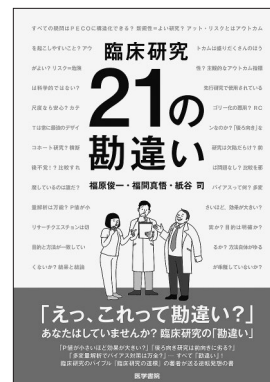


BOOK Review

臨床研究 21の勘違い

評者

吉村 芳弘 熊本リハビリテーション病院サルコペニア・低栄養研究センター長



目次を眺めたら我慢できなくなり、寝食を忘れて最後まで一気に読んだ。時が経つのを忘れるほど読書に熱中したのは久しぶりだ。著者の一人である福原俊一先生は過去の自著『臨床研究の道標』（健康医療評価研究機構、2013年）の中で、臨床の「漠然とした疑問」を「研究の基本設計図」へ昇華する方法を説いた。本書は実質的にその続編に位置される（と私は思う）。臨床研究を行っている、あるいはこれから行おうとしている医療者への鋭いメッセージが健在である。

「すべての疑問はPECOに構造化できる？」「新規性＝よい研究？」「『後ろ向き』なコホート研究？」「横断研究は欠陥だらけ？」「比較すれば問題なし？」「多変量解析は万能？」「バイアスって何？」「P値が小さいほど、効果が大きい？」などなど……。

偉い先生の演台上からの回りくどいレクチャーよりも、ひたすら現場目線のまるで同僚から発せられるような身近な疑問を丁寧に解説する書面づくりがありがたい。なによりテーマの立て方が俊逸だ。私や同僚がしょっちゅうつまづいて苦勞している臨床研究の「勘違い」を見事に言い当てており、これは私（や同僚）に向けて書かれた本なのでは、と大いなる「勘違い」をしてしまう。

臨床研究に対する私の大いなる勘違いの一つに、「臨床研究を始めるにはまずは統計を理解しなければならな

い」というものがあつた。本書はこの勘違いを気持ちがよいほど切って捨ててくれる。統計学の知識やスキルはもちろん重要だが、研究デザインはそれ以上に重要だ。臨床研究の本質は、自身の日常診療から発生した疑問と、それを解決するための研究デザインを入念に推敲することである。

本書に登場した言葉の中に私の心に刺さって離れないものがある。「一度きりの『出会い』を大切に」だ。人生は一度きり、人との出会いも一度きり。人生を大きく切り開くのは多くの場合において自分ではなく他人だ。もちろん出会いは自分で選択できる。優れたメンターとの出会いも一度きりかもしれない。臨床研究も出会いだ。身近な疑問を質の高い臨床研究に昇華することができれば、一つの出会いが大きな扉を開くことになる。

というわけで、私はこの本を読んでいる間ずっと、「ああ、次の臨床研究をやりたいな」とばかり思っていた。なにしろ臨床研究が対象の話で、本の中にいくつものクリニカルクエスションやリサーチクエスションが登場するので、一度やりたいと考え始めると、生唾が出てくるくらい次の臨床研究をやりたいようになってくる。臨床研究をやりたい、そんな純粹かつ熱い思いがこみ上げてくる。だから臨床研究はやめられない。

福原 俊一、福間 真悟、紙谷 司 著

A5／256頁／2021年／定価3,960円（本体3,600円＋税10％）／ISBN978-4-260-03458-6／医学書院刊